

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和元年10月25日現在

今月の重点活動

■夏秋トマト 飛騨トマト優良ほ場巡回研修を開催

9月30日（月）、飛騨野菜出荷組合トマト部会の優良ほ場巡回研修が行われ、生産者や関係機関など72名が参加した。

優良ほ場巡回は、毎年各地区から選定された圃場の中から今年は丹生川地区と高山地区の3つの優良ほ場を巡回した。

当日は、農業普及課やJA営農指導員からほ場の概要や見所を紹介するとともに、園主から栽培の工夫等について説明を受けた。どのほ場も着果・肥大ともに良好であり、参加者と園主と熱心に意見交換が行われ、非常に有意義な研修であった。

農業普及課では、今後も高単価が期待される秋季に、少しでも多く出荷できるよう技術指導を行っていく。



【生産者達にはほ場の見所を紹介する普及指導員】

多様な担い手づくり

■担い手 農水省 就農・女性課長と新規就農施策に関する意見交換会を開催

10月15日（火）高山市において、農林水産省 就農・女性課長と新規就農施策に関する意見交換会が開催された。最初に3市1村の組長及びJAひだ代表理事組合長との意見交換、その後に今年度からの新規就農者夫婦と研修受入農家及び長期研修生2名との意見交換を行った。

前職を退職して東京から移住し、2年の研修を経て今年度からトマト栽培を開始した夫婦は、トマト経営の難しさを実感すると共に地域住民や生産者、関係機関の支えに感謝していることや農業次世代人材投資事業が確実に追い風になっていること等を伝えた。また、研修生からは、農大卒だが非農家のため、実践的な知識や技術の習得に長期研修が大変役立っていること、多大な初期投資を軽減する上で研修中の資金補助が有効であったとの話があった。

農業普及課では、就農支援施策を活用しながら新規就農者の確保～就農後の経営安定まで今後も継続して支援していく。



【課長との意見交換】

■6次産業化 6次産業化経営体支援

10月10日（木）白川村において、6次産業化に取り組む意向のある農業者の面談を岐阜県6次産業化プランナー、ぎふアグリチャレンジ支援センター及び中小企業診断士を交えて行った。そこでは、6次産業化商品の開発や販売におけるポイントの整理、土台となる1次産業（農業生産）の課題整理等を行った。各専門家の視点から様々な意見が交わされ、6次産業化及び農業経営を進める上で重要な点が、様々な角度から明らかになった。

農業普及課では、今後も関係機関や各分野の専門家と連携して、6次産業化に取り組む農業者へ様々な角度から支援ができるよう、取り組んでいく。

■ 飛騨市農業士会 若手農業者とともに視察研修会を開催

飛騨市内の指導農業士および青年農業士からなる飛騨市農業士会は、10月9日（水）から10日（木）の2日間で視察研修会を開催した。今年度は、若手農業者にも参加を呼びかけ、数名の若手農業者も参加した。視察先は、幕張メッセで開催された第10回農業Week（国際農業資材 expo など）と新設された豊洲市場で、初日に訪れた幕張メッセでは新しい資材や技術などについて各種出店業者から詳しい話を聞き、各自の経営の参考にしていた。また、2日目に訪問した豊洲市場では青果部門の担当者から施設の概要や運営状況などの説明を受け、規模の大きさや最新設備に驚嘆していた。

農業普及課では、農業士会や若手農業者の活動を支援しており、今後も研修会の開催など継続して支援していく。



【視察の様子】

売れるブランドづくり

■ 夏秋トマト 飛騨3Sシステム研究会で現地視察

飛騨全域の夏秋トマト3Sシステム研究会が10月8日（火）に下呂地域で行われた。

研修会は約20名が参加し、中山間農業研究所の研究者から現地実証ほの説明やほ場の生育状況に加え施設の工夫や改良点などの視察を行った。

参加者は慣行の土耕栽培と組み合わせて経営全体の所得安定が実現しやすい栽培法であると実感しており、今後の地域での導入拡大が期待される。



【研修会の様子】

■ 夏秋トマト 丹生川トマト部会 部会員相互のGAP取り組み状況確認

丹生川トマト部会「天空のめぐみ班（GAPに先進的に取り組むグループ）」では、班内のGAP取り組みを徹底するため内部検査を実施している。

班全員を対象に、3班体制でGH評価員の資格を持つ部会員が巡回し、グローバルGAP基準に準じて現地審査を行った。特に、農薬や肥料の保管や保管庫の整理整頓について重点的確認が行われ、改善事項の提案がなされた。

農業普及課では、審査基準に関する情報の提供や具体的な改善対策の提示など、円滑な活動の支援を行い、県GAP確認制度の認証に向け支援を行っていく。



【改善対策を協議する部会員】

■あきしまささげ **あきしまささげ品評会を開催！**

「あきしまささげ」は高山市丹生川町を中心に古くから飛騨地域の高冷地で作られ、「飛騨・美濃伝統野菜」に認定されている。調理すると縞模様が消え、鮮やかな緑色になることから「湯上り美人」との呼び名もある。しかし、収益面で魅力に欠けることもあり、年々栽培者は減少している。

このような状況のなか、栽培者の励みとなるよう「あきしまささげ」の品評会が9月25日（水）に開催された。

出品され18点について農業普及課、丹生川蔬菜出荷組合役員、JA関係者らが縞の入り具合や揃い等を評価しながら審査した。審査の結果、最優秀賞及び優秀賞計3点を選出し、入賞したあきしまささげは、古田知事に贈呈された。

農業普及課では、今後もあきしまささげの安定生産、品質向上等に向けた取り組みを支援していく。



【審査の様子】

■ほうれんそう **JA全農岐阜パッキングセンターを視察**

ほうれんそうを生産する上で、下葉とりや袋詰などの調製作業を行うパート不足が産地の課題となっていることから、全農岐阜では今年9月より岐阜市の「JA全農岐阜パッキングセンター」において飛騨産ほうれんそうの調製作業をモデル事業として実施している。

今回、ほうれんそうの労働力不足解消を目的として設置された「飛騨ほうれんそう産地基盤強化プロジェクトチーム」の活動の一環として、JA全農岐阜パッキングセンターの視察を開催した。昨年販売された軟弱野菜調製機を始めとして、調製作業の機械化がされており、効果的な使い方や人員配置など、より効率的に調製を行う方法について知見を深めることができた。

今後も「飛騨ほうれんそう産地基盤強化プロジェクトチーム」を中心として、関係機関と協議しながら労働力不足の解決に向けた取組みを進める。



【視察の様子】

■ダイコン・荘川黒谷ダナ生産組合 **発生数の見える化で、今年もキスジ被害激減！**

高山市荘川町ダナ生産団地のダイコン栽培では、収穫始めの8月下旬～9月上旬にキスジノミハムシの大被害を受けることが多く、どのように防除しても防ぎきれなかった。そこで農業普及課は病害虫防除所と連携して開発したキスジトラップを要所に設置し、一週ごとに発生数を調査してトラップ本体に書き込み、発生数がリアルタイムで分かるようにして、生産者らが防除適期を判断できるようにした。

また、農業普及課からは効果の高い農薬を、使用できる収穫前日数順に並べた表を農家に配布しており、今年はキスジの被害を軽減するとともに近年になく台風・豪雨・長期干ばつ等の被害が少なく、農家の努力が報われる結果となった。



【強い誘引力でキスジ監視】

■果樹 JAひだ農業まつりで飛驒の果樹をPR

10月19日（土）、20日（日）の2日間にわたって開催された“JAひだ農業まつり”に「JA果実出荷組合」と「山ぶどう研究会」が出展した。「JA果実出荷組合」ではりんご、「山ぶどう研究会」では生のブドウや山ぶどうジュースなどの加工品の販売も行った。

当日は、沢山の組合員や地域住民が訪れ、それぞれのブースで試食を行い来場者と交流しながら販売PRした。来場者からは「飛驒のりんごはおいしい」という声がたくさん聞かれた。

今後農業普及課では、飛驒の果樹栽培の技術向上やPR活動を積極的に行っていく。



【りんごを販売する組合員】

住みよい農村づくり

■りんご クマによる獣害の発生防止対策

飛驒市では秋以降、果樹園へのクマ害が継続的に発生しているため、ほ場におけるクマの侵入経路を調査した。

調査では、生産者への被害状況の聞き取りと並行して、果樹園でセンサーカメラによる動物の行動把握を実施した。

調査結果は、随時生産者や猟友会と共有し、果樹園外周の電気柵の補強や、侵入経路付近の雑草地の草刈り、捕獲罠の設置などを実施した。

その結果、10月中旬以降はクマによる被害がほぼ無くなっている。

農業普及課では、今後も引き続き関係機関と連携しながら、果樹の生産と産地振興を支援していく。



【調査の様子】